
流星演舞

エディルン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星演舞

【Nコード】

N34340

【作者名】

エディルン

【あらすじ】

ルディーナヴァル朝カステイナラバ帝国。

後に銀河系人類社会の五分の四を支配することになる大帝国の創設者は、鮮血の色をした瞳の女帝だった。彼女の道に綴られる、破壊と狂気。

付属 歴史（前書き）

昔書いた小説長編小説『流星演舞』シリーズを思い出して書いた小説です。

ただし、昔に書いた分はすでに手元に残っていないため、初公開に等しい状態ですが。

付属 歴史

歴史

13日間に及ぶ、核の戦争。

地球のすべてを破壊つくした戦争も、だが人類の絶滅を招く最悪の事態を避けることはかろうじて適った。

その後、破壊された世界で人類の文明は急速度に後退したが、やがて時を経た人々は地球の大気を越えて、太陽系内へと進出を始める

それから、千年の時を置かずして、太陽系全域へと生活圈を拡大した人類社会は、地球統一政府ウー・チャルデ・ドミニオンの下、繁栄を謳歌した。

だが、支配者の名を冠するこの男は、統治者としては有能であったが、搾取の名人でもあった。

彼の独裁者によって、地球統一政府は全太陽系を支配する中心として栄えた。だが、彼の死を契機として、各地で発生した紛争によって、間もなく太陽系内の勢力は、内紛に継ぐ内紛を重ねることになる。

しかし、その頃には既に太陽系外に進出していた13の惑星が、他の宇宙空間への植民を開始していた。

すでに、太陽系の時代は終わり、広大な銀河系への進出の時代を迎えていた。

それから、万を数えるほどの歳月が過ぎ去る。

銀河系全域へと拡大した人類社会は、さまざまな国家、勢力が乱

立っていた。

とはいえ、それらすべては無作為な人の集まりではなく、国家機能を備えた社会として存在した。それも、いくつもの恒星系を従える強大な国家群であり、その規模は太陽系時代の人類社会からは、想像さえもできない巨大な国家群だった。

この時代のことを、銀河系人類社会と呼ぶ。

銀河系全域を生活の舞台とすることになった人類。

その中でも、強大国として知られているのが、リユーフレス・リフレネシア同盟国。カステイナラバ帝国。アラス帝国。アブレネーシユ国。ハルネイス国の五つの大国であった。

これは、銀河系人類社会における、カステイナラバ帝国から始まる物語。

篡奪

篡奪

カステイナラバ帝国。

現状における銀河系人類社会において、五つの強大国のひとつに上げられる国である。

かつて、この帝国を築き上げたのはトラヴウンコール・サータヴアーナ皇帝であるが、その血統による支配は、このときを持って終焉しようとしていた。

すべては、もはや彼女の前で従うのみだ。

赤い深紅の髪と瞳の女。それは脈動する血液のように赤く、まるで鮮血を連想させる。その最たるものが、彼女の赤い唇。

鳥肌がたつほどに、ぞつとするような美女。

ただし、それは美しさの中でも妖艶というしかない美しさ。あるいは、魔性の美貌だった。

だが、その魔女にもっとも似つかわしくないのが……いや、それゆえに似つかわしいのかもしれない。

この宇宙という巨大な生命体であり、そして世界そのものが誕生した瞬間を思わせる、始まりの炎のような瞳だった。

その彼女の瞳が、目の前に居並ぶ者たちを見る。

この場に集うものは、帝国にいる千名を超える貴族と、宮廷に仕える官僚たちだ。この国の中枢とも言うべき者どもだった。

その者たちの多くは、彼女の美貌に目を奪われている。その多くが、喜びと恍惚を浮かべている。

彼女がいるだけで、男とは全てがそうなってしまふのだ。

それは、この場に強制的に引き出されている、敗者となった者たちでさえ、無縁ではいられない。
ただ1人の人物を除いて。

ニツコリ

彼女は笑った。

だが、反対にその人物は笑わない。
いい目立った。

反逆し、今にも彼女を殺しかねないほどに、強烈な瞳だ。こつこつと眼はとても好きだった。

少なくとも、怯えてビクビクするだけの、役にも立たないザコを見るのに比べれば、彼女の中に宿る狂気に、嬉しさを与えてくれた。
(いいのよ、坊や。あなたが私の寝首をかいて下さっても)

勝者となったからではない。

彼女は、心の中から本当にそう願ってやまなかい。

だが、その人物より視線を外した。

彼女が歩みを進めて、この場で最も高い位置に設えられた座へと向かう。

漆黒と銀の粒。銀河をもして作られたその椅子は、この国の皇帝のための玉座だった。

(つまらないイスね)

と、内心で彼女は玉座をあざける。

(こんなものはいくつでも持つことができる。

たかだか銀河を支配する程度のこと、なぜ多くの人間は心を砕くのかしら?)

そう、思いながら、彼女は目の前の玉座より振り向いた。

「フーーーーー」

集う貴族たちの歓声が上がる。

それを片手で静止、彼女は微笑んだ。

そして、ゆっくりりと玉座へと腰を落ち着けた。

「カステイナラバ帝国第29代皇帝、カステイア陛下御即位！」

その場に声が轟き、彼女の即位を宣布する声が出た。それを機に居並ぶ者たちが歓声と拍手を上げようとした。

しかし、それよりも早く彼女は訂正させる。

「間違っている！」

一瞬にして静まり返る場内。

「私は、たった今を持って新たな王朝の君主となったのです。

確かに私がカステイナラバの皇帝となりました。

ですが、私をそこにいる愚図な坊やの血統と一緒にされては困るわね」

そういい、玉座に腰を落ち着ける美女は、目の前に引きずり出されている人物を見た。

彼女の率いる軍によって玉座を追われた、ついさっきまで皇帝だった男だ。この男のことを、彼女は昔から坊やと呼んでいる。

それは、彼が皇太子であった時も、そして皇帝の位に君臨してからもだった。

サータヴァーナ王朝カステイナラバ帝国の皇帝……いや、元皇帝たるアラハバート陛下。

「ねえ、坊や？

私をこの国の皇帝などと認めたくないでしょう？」

「……」

彼女の問いに、しかし元皇帝は顔をそむけるだけで、抵抗する。

（ああ、つまらない。なんだ、やっぱりこの程度のことしかできないのか）

視線を外した元皇帝に、カステイアは失望した。

何かを言う必要はない。

だが、この私に挑むのならば、せめてにらみ返すくらいのことができるなくては面白くない。それでこそ、少しは今後の楽しみになるというのに。

彼女が元皇帝に向けていた視線は、彼女の興味が失われると同時に、別の方を向いた。

彼女は再び居並ぶ貴族たちに向けて言い放った

「いいですか。

私は新たな王朝の当主となりました。

そう、ルディーナヴァル大公カステイアが、今日よりこの国の主となるのです。

ですから、29代目の皇帝ではなく、1代目の皇帝になるのです」

そう、彼女は命じた。

ルディーナヴァル大公カステイア。それが彼女の名だ。

サータヴァーナ王朝下では、大公家の当主として君臨した女の名前。だが、前の当主である祖父が当主を務めていた時代に、すでにルディーナヴァル家は皇帝家を超える権力と権限を掌中に収めていた。

皇帝は、単なるお飾りと化していたのだ。

祖父が帝位につかなかったのは、皇帝の存在を恐れていたことでは

なく、単に時間がそれを許してくれなかったからにすぎなかった。
そう、人間に与えられている時間からは、彼女の祖父とても逃れることができなかつたのだ。

「ルディーナヴァール王朝創始者であられる、カステイア陛下ご即位
！」

場内に改めて、彼女の即位を知らせる声が響いた。

今度は満場の完成と拍手が場内に響き渡る。

この場に居並ぶ帝国の貴族たちは、このときよりすべて彼女、カステイアの臣下となつた。

新たな王朝の創設者たる皇帝に、臣下たちは一斉にひれ伏すのだつた。

反乱

反乱

これは、カスティアが玉座を篡奪する少し前の出来事。

皇帝軍百万を撃退。

ルディーナヴァル大公カスティアが、六十万の軍を率いて反乱を起こした。

周辺の数十に及ぶ恒星系を陥落させる必要などなかった。それを納めるすべての貴族は、もはや彼女の手中にある者たちだった。

彼らは反乱を起こした大公に対して、刃を向けるのではなく、逆に刃を差し出して、共に反乱の同胞となってしまった。

続く皇帝軍との戦闘は、数で勝る皇帝軍優位に思えるかもしれない。

だが、軍の有力な指揮官は彼女の側にすでにあり、おまけに百万と号する軍勢は、ただの烏合の衆でしかなかった。

わずかに五百の被害を出すこともなく、やすやすとカスティア率いる反乱軍は、皇帝軍を撃破してしまった。

そして、首都星での攻防戦は苛烈だったが、短い時間で終わってしまった。

その後に行われたのが、新たな皇帝の座についた、カスティアの

即位式だった。

「つね、ダグつまらないものね」

即位式後、カステイアは冠をまるでおもちゃのように指で転がしながら言った。

彼女の織手はまるで絹のような滑らかさ。しかし、その手は血にまみれた王者の手であるが……

「ザコを相手にすれば、しょせんこんなものね」

「はい、陛下」

「もうっ、同意しないでよ」

新たな皇帝は顔を膨らませて、文句を言う。その表情は、艶やかな美貌の彼女からは、考えられないくらいに幼く、子供っぽい。そんな彼女のその傍に、紫色の髪と目をした男が控えている。ダグラス。カステイアにもっとも近い側近であり、2人が常ならぬ関係にあると人々が噂してやまぬ人物だ。

「ねえ、ファルガー」

「せっかくだから、お小言を言っつてよ」

第一の側近の言葉がつまらないものだから、彼女は続けて青い髪の毛の名を呼ぶ。

ユウ・ファルガー。

ダグラスと共に、カステイアの側近たる人物だ。

カステイアはいかにおいて、軍を率いるに置いて、もっとも優秀

な人物である。奇をてらう傾向はなく、軍の数と規模に応じて確実に相手を撃破していく、堅実な軍の指揮官。

カステイアは彼の才能を、『百万の艦隊を与えても、ファルガーならうまく扱えるでしょう』と、評価している。

もつとも、百万の艦隊ともなれば、このカステイアならば帝国全軍の五分の一近くの戦力を、1人の男の手に委ねることになるが。

「ザコと言われれば、言われた側は心外でしょうね、陛下」

「そうでしょうね。」

でも真実だから仕方がない」

「とはいえ、我々が勝ったからいいものの、負けていてもそのようなことを言えましたか？」

「あら、心にもないことを言わないでよ」

カステイアは鋭い視線をファルガーに飛ばした。

皇帝軍との戦いは、戦う前にすでに勝負がついていた。数での差はあったが、それ以前の戦略と、軍の質で徹底的な差があったのだ。万に一つも負けることのない戦い。

ファルガーは、このようなこんなことをいちいち説明する必要がない人物である。

「不興を買いましたか？」

「別に」

鋭い視線は飛ばしたが、カステイアは結局それ以上追及はしなかった。

「そう。別にいいのよ。」

でも、一年後ぐらいにも、同じことを言わないでね」

「努力いたします」

ファルガーはそのように答えたが、カスティアは彼の言葉を信じなかった。

それから一年とたたずに、元皇帝のアラハバートが、新皇帝カスティアに反逆した。

いや、そもそも反乱によって皇帝を位から追い出し、三だっしたのはカスティアである。

だから、反逆という言葉を元皇帝に用いるのもおかしいかもしれない。

ただ、いずれにしても状況の説明は必要だろう。

帝位を篡奪したカスティアであったが、その後彼女は敗者である元皇帝を殺害するようなことはなく、高位の貴族としての扱いを与えた。

幽閉はしたものの、それでもその眼をかくぐってカスティアに反対する者たちが、元皇帝の元に密かに集まっていた。

秘かにというが、カスティアは、それを知っていた。知っていたが、放置したのである。

その後反カスティア派は、元皇帝を連れて宇宙空間へと逃げ去り、彼らの本拠地とした惑星で、軍を上げた。

「名は、カスティナラバ帝国正当政府。軍の名は、カスティナラバ帝国正規軍とのことです」

「クスクス、面白いわね。」

芸がなくて、陳腐でどうしようもない。

これがサータヴァーナ王朝が歴史に残る最後の名前になるんだか

らね」

反乱の方を受けたカステイアは、驚くどころか、笑ってこの反乱を見た。

とはいえ、元皇帝を押し立てた反カステイア派の戦力は、70万に上る軍船を用意し、そこには高位の貴族たちが含まれていた。

12の恒星系がそれに賛同し、反カステイアの氣勢を上げた。

これに対してカステイアは、「さあ、行きましようか」そのように軽く答えて、自ら軍を率いての親征を行った。

ただし、その軍勢は僅か7万の艦隊。

皇帝の新征にしては、あまりにも微小な数だ。

だが、それから一月とたたずに、反カステイア派の拠点は陥落していた。

反カステイア派が予想もしなかった、皇帝カステイアの電撃的な攻撃。

反カステイア派拠点が軍を出勤させる前に攻撃を受け、宇宙港から艦隊が出撃する暇もなく、次々と戦艦が攻撃され戦闘不能になっていった。

そればかりか、反カステイア派の拠点である惑星に対して、皇帝は次の兵器を使用するように命じた。

「インドラを使いなさい」

「陛下！」

インドラという言葉聞いた時、それを聞いた部下は驚きの声を上げた。

「どうして驚くのかしら？」

「インドラは、対惑星兵器です……それも惑星を完全に破壊するのではなく、惑星上の生態系を回復不能な状態に陥れ、そこに住んでいる人間を未来永劫に苦しめることを目的にした、非人道的な兵器

です」

「そんなことは分かっている。

だから、使うの。」

見せしめにはちょうどいいでしょう」

皇帝は何事もないように口にし、非人道兵器の使用をあっさりと許可した。

すでに、防戦能力を失い、無防備と化していた反カスティア派の拠点の惑星は、このあと軌道上に不気味な艦隊の影が集まるのをただ黙って見ているしかなかった。

そして、園完隊から、やがて次々に惑星へと向けてミサイル攻撃が行われた。

ミサイルを惑星の成層圏内に突入すると、白い光を上げて一瞬で周囲の中性子と結びついて、化学反応を起こす。

惑星の各地に白い丸が描かれていく。

原子単位で崩壊を招く爆発の連続だ。

宇宙空間から見ればわずかな小さな点に見えないそれは、しかし一つの爆発で何百万もの生命を世界から消し去っていた。

そして、その後数百世紀にわたって、この惑星の環境は修復不可能な状態になる。

「全部壊してはダメ。」

そう……惑星の人間がギリギリ生き残る程度に加減するの。生かしておかなければならない。

この惑星の人間は、子々孫々に至るまで、何千年にもわたって、私に反抗したことを後悔しないとイケないのだから」

そついうカスティアの瞳は、うっとりとしていた。

白く照らし出される惑星の光が、彼女の赤い瞳に移される。それ

がまるで、彼女の鮮血のような瞳をさらに赤く染め上げるかのよう
に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3434o/>

流星演舞

2010年10月16日19時19分発行